

## 未来を見据えた若者支援と親支援の充実を目指して

in東京セミナー

### 研修報告書

江津市議会議員 石橋孝義

- 日 時 平成30年10月30日(火) 14:00~16:30
- 場 所 東京都中央区京橋 1-7-1 戸田ビルディング  
TKP 東京駅八重洲口カンファレンスセンター

- 講 座

14:00~16:30

- ◎ 「福祉と教育の縦割りを乗り越える」

講師:水野達朗(家庭教育支援センターペアレンツキャンプ代表理事)

〔内容〕

1. これからの時代に求められる「切れ目のない子育て支援」とは
2. 切れ目のない子育て支援を目指すニューボラとは何か
3. 日本版ニューボラ(子育て世代包括支援センター)の課題と展望
4. 福祉と教育の縦割りの現状と真の「切れ目のない子育て支援」とは

#### 1. これからの時代に求められる「切れ目のない子育て支援」とは

##### 1-1 これからは生産人口を取り合う時代に

- ・ 30~35年後には1億人を割り込む
- ・ 急速に高齢化が進み、年少人口(0~14歳)は30年後に1,000万人(人口比10.1%)を割り込む
- ・ 生産年齢人口(15~64歳)は約30年後5,000万人(人口比50.5%)を割り込む
- ・ 逆に老年人口(65歳~)は約30年後3,900万人(人口比39.3%)を超えてピークになる
- ・ **このような状況が続くと、地域社会の基盤維持が限界を超える**
- ・ **いかに生産年齢人口を集めるかが自治体存続の鍵になる**

##### ○ 消滅の可能性がある自治体

- ・ 2040年はどうなっている

自治体の約半数が存続危機

地方自治体数 1,788 (2010年1月時点)

896の自治体が消滅の可能性あり(内、523の自治体で人口が1万人以下に)

##### 1-2 親子が笑う、地域創成のまちづくりを目指すには

- ・ 人口減少と高齢化が進む社会で、地域格差が出て、特に生産年齢人口世帯が都市部に集中していく。

- 10年後、20年後、30年後の地域社会の基盤維持を考えると生産年齢人口世帯、特に子育て世帯の流出防止、子育て世代を呼び込むための施策を考えなければならない。



- 地域に活気をもたらす子育て世帯が何を求めているかがポイント。地域活性化には就業支援や各種インフラの整備も重要、子育て世帯に関しては特に安心して子育てができる環境や支援体制が重要。

### 1-3 鍵となるソーシャル・キャピタル

- 子育てしやすいまちづくりに求められるもの、近年注目されている**ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）**

#### ＜ソーシャル・キャピタルとは＞

人間関係資本、社交資本、市民社会資本と訳されるもので、1990年代以降、社会学、政治学、経済学、経営学等で用いられる概念。人々との協調行動を活発にする事によって、社会の効率性を高めることに基づき、必要な「社会の信頼関係、規範、ネットワーク」といった社会組織の重要性を説く概念。つまり、「社会問題にかかわっていく自発的団体の多様さ」「社会全体の人間関係の豊かさ」「地域力」、「社会の結束力」等がある。

- ソーシャル・キャピタル
  - 人間関係、組織間の関係の作りやすさ
  - 社会全体の人間関係の豊かさ
  - 近年は地域関係性が希薄化し、ソーシャル・キャピタルが貧しくなっている。

そのため、孤育てと呼ばれる孤立化した家庭が増加している。

### 1-4 これからの時代に求められるソーシャル・キャピタル

- **地域のソーシャル・キャピタルが豊かなことによるメリット**

- **子どもの教育成果の向上**
- **近隣の治安の向上**
- **地域経済の発展・地域活動の活性化**
- **地域住民の健康状態の向上**
- **政治参加、まちづくり参加の拡大**

ソーシャル・キャピタルを豊かに醸成していくには、「切れ目のない子育て支援」が重要。家庭が孤立化しないように、行政側と継続的につながることができるような支援が求められている。

### 1-5 なぜ、切れ目のない子育てがソーシャル・キャピタルの醸成を担うのか

- ① **愛着形成の時期からサポート**

不安定になりやすい周産期から母子に関わることで、人間関係のベースとなる母子の愛着形成がスムーズになる。これによってソーシャル・キャピタル醸成の基礎となる。「他者への信頼」が育める。

## ② 産前産後ケアの拠点（つながれる場）

周産期の不安定な時期から、母親に寄り添い、いつでも相談できる場（つながれる場）があることが重要。この時期からしっかりサポートすることで児童虐待等の防止にもつながる。課題を抱えている母子を把握することもでき、今後行政支援につなげることができる。また、大変な時期から寄り添うことで支援者との間に信頼関係も生まれる。

## ③ 地域への架け橋

切れ目のない子育て支援 → 母子をケアする医療モデルとしての支援だけではない。その後の行政支援や子育てサロン、地域の活動へとつなげる懸け橋としての役割も担っている。また、支援を受けた側が支援をする側に回る循環型の支援にもつながる。

地域とのつながりを活発化させ、循環型の支援を行うことで、地域のつながりが強固となり、ソーシャル・キャピタル醸成される。

- ・現状、日本の行政支援においては「切れ目のない子育て支援」が実現しているとは言えない。
- ・医療と福祉の切れ目、福祉と教育の切れ目など、まだ課題も多く、不完全な状態で、自治体によって取り組みにばらつきもある。
- ・目指すべき「切れ目のない子育て支援」の一つの形

## 2. 切れ目のない子育て支援を目指すネウボラとは何か

ネウボラとは、フィンランドで制度化されているワンストップ型の子育て支援拠点

### ○ ネウボラの変化（当初から現在）

- ① 医療モデルから生活モデルへの転換
- ② ワンストップ化（支援の連続性・一貫性の向上）
- ③ 連携・ネットワーク化

- ・ネウボラは切れ目のない子育て支援の中核的存在になっている

### ○ ネウボラの特徴

- ・ネウボラ支援の8つの特長

- ① 普遍性の原則（すべての妊婦・母子・子育て家族が対象）
- ② 動機づけの工夫としての育児パッケージ（母親手当）
- ③ 利用者中心の「切れ目のない子育て支援」
- ④ リスクの早期発見・早期支援
- ⑤ ネウボラ保健師をサポートする後方支援チームやほかの専門家との連携
- ⑥ 手厚い産後ケア（産後うつ病をケアしてポジティブで楽しい子育てに）

- ⑦ 母子だけでなく子育て家族全体を包む支援
- ⑧ ネウボラ保健師（現場）のための全国共通の指針
- フィンランドと日本における出産・子育て支援の比較

- ・〈フィンランドの特色〉

- 妊娠・出産・子育てでの切れ目のない支援
- ワンストップ拠点で対応
- 同じ専門職（主に保健師）がかかりつけで個別対応
- 母子だけでなく家族全体を支援

- ・〈日本の特色〉

- 妊娠周産期・子育て期・就学期にそれぞれ支援に切れ目がある
- 母子の状況に応じて、相談先や支援機関が異なる
- 医療モデルが中心（兼審、発達検査等）
- 母子に対する支援が中心（出産後は子ども中心の支援）

### 3 日本版ネウボラ（子育て世代包括支援センター）の課題と展望

#### ・妊娠・出産包括支援モデル事業とは

日本においても妊娠出産子育ての切れ目のない支援が求められるようになり、厚生労働省を中心に検討が進められてきた。平成 26 年から妊娠・出産包括支援モデル事業がスタートした。

「妊娠・出産包括支援モデル事業」は次の 3 つから構成されている

#### ①母子保健相談支援事業

妊産婦当からの支援ニーズに応じて、母子保健や子育てに関する様々な悩みへの相談対応を行い、支援を実施している関係機関へつなげる。

#### ②産前・産後サポート事業

妊産婦等の孤立感や育児不安の解消を図るため、助産婦等による専門的な相談支援を行う。専門家だけでなく、地域の子育て経験者やシニア世代等も相談支援を行う。

#### ③産後ケア事業

出産直後や休養やケアが必要な産婦に対し、心身のケアや育児のサポート等のきめ細かい支援や休養の機会を提供する。

妊娠・出産包括支援モデル事業は平成 26 年度は全国の 29 市町村において実施され、平成 27 年度からは母子保健相談支援事業を利用者支援事業（母子保健型）として、消費税財源を活用して拡充することとされた。

#### 利用者支援事業（母子保健型）への移行の際の 3 つのポイント

##### ① 子育て世代包括支援センターの設置

様々な機関が個々に行っている支援について利用しやすくなるよう、ワンストップ拠点として子育て世代支援包括センターを設置する。

##### ② 母子保健コーディネーターの導入

子育て世代包括支援センターにおいて、保健師等のコーディネーターがすべての妊産婦等の心身の状態や周りからの支援の状況等、健診（妊婦健康診査・乳幼児健康診査等）の結果や保健指導等の内容を継続的に把握し、様々な母子保健サービスや子育てサービス等を実施する関係機関へつなげる。

### ③ 支援プランの策定

特に手厚い支援が必要な方に対しては、関係機関と連携してオーダーメイドの支援プランを策定することとし、妊産婦の方に対して一層きめ細かい支援を実施する。

平成 29 年 4 月に日本版ネウボラと言われる「子育て世代包括支援センター」が、妊娠出産子育ての切れ目のない支援のためワンストップ拠点として法定化された

#### ○ 「子育て世代包括支援センター」の満たすべき基本 3 要件

- ① 地域性、専門性、当事者性のバランス
- ② 利用者支援機能
- ③ 地域連携機能

#### ○ 「子育て世代包括支援センター」の支援概要

妊娠期・出産直後・子育て期の各ステージを通じて、地域の関係機関が連携して切れ目のない支援を実施できるよう、必要な情報を共有し自ら支援を行い、または関係機関のコーディネートを行う。

#### ● 日本版ネウボラ導入例

- ・ 埼玉県和光市
- ・ 三重県名張市
- ・ 鳥取県日吉津村

#### ○ 日本版ネウボラ導入の際の課題

##### ① 医療機関と行政支援の切れ目

医療機関中心の妊娠出産と子育て行政支援のスムーズな接続

##### ② 福祉（首長部局）と教育（教育委員会）の切れ目

就学前と就学後の担当部局が変わることによる接続

## 4 福祉と教育の縦割りの現状と真の「切れ目のない子育て支援」とは

### ① 医療機関と行政支援の切れ目の課題解決へのポイント

- ・ 妊娠早期や周産期から行政担当専門職と妊婦が信頼感を積み上げられるように支援内容を工夫（面談場所、面談回数、直接面談以外の手法検討等）
- ・ 妊婦の通う医療施設との連携
- ・ 民間医療機関との情報共有のためのルール

(自治体独自の個人情報取り扱いの特例措置、本人同意による情報提供と共有に関するガイドライン等)

- 行政との連携による民間医療機関の拠点化の検討

## ② 福祉と教育の切れ目のない支援に向けた課題解決へのポイント

- 支援制度の枠組みを作る際に、家庭教育支援に関する保護者のニーズをワンストップで受け止め、家庭教育支援チーム等の教育関係機関につなぐ役割を果たす、家庭教育支援コンシェルジュ（仮）の育成が急務
- 家庭教育支援コンシェルジュが子育て世代包括支援センター（日本版ネウボラ）と家庭教育支援チーム双方に係わる形が望ましい
- 妊娠期・周産期・幼児期・学齢期・自立期まで切れ目のない保護者のサポートを行うことで、福祉の子育て支援と教育の家庭教育支援の垣根をなくし一貫した家庭教育支援の体制構築を目指す

## ● 切れ目のない子育て支援の先進事例

- 和歌山県湯浅町

## ◎ セミナー内容のまとめ

今、日本は少子高齢化に直面している。このような状況が続くと、地域社会の基盤維持が限界を迎える。その中でも、子育て世代の人口流入を達成している自治体がある。

セミナーでは、医療や教育などと分けた議論ではなく、包括的な視点で、切れ目のない包括的な子育て支援について話された。そして、保健福祉を中心にフィンランドのネウボラを参考にした切れ目のない子育て支援の取り組みが進められている。この取り組みに対して、教育分野でも連携を進めることが重要だと考える。

家庭教育支援と日本版ネウボラの融合による「切れ目のない包括的な子育て支援」こそが、社会投資のポイントと言える。

医療と福祉と教育の切れ目解消に向けて、本セミナー内容が活かされることが大事。

## 〔感想〕

- 福祉と教育の縦割り行政では溝ができて、さまざま問題解決には常に密接な連携が不可欠だと感じた。
- ネウボラとアウトリサーチ型の家庭教育支援の連動が生み出し、親子の笑顔が出ると感じた。
- いずれにしても、なかなか難しい問題で、自身十分理解できていないので、今日をきっかけに理解の深度化を図りたいと感じた。

終わり